

草の徑

松本清張

草の径

松本清張

文藝春秋

草の径

一九九一年八月一日

第一刷

著者

松本清張

発行者

豊田健次

発行所
株式会社

文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三一二三

印刷所

凸版印刷

製本所

大口製本

(定価はカバーに表示してあります)

万一、落丁乱丁の場合は

お取替え致します

草の徑・目次

老公 5

モーツァルトの伯樂 69

死者の網膜犯人像 133

ネッカー川の影 157

「隠り人」日記抄 205

呪術の渦巻文様 251

夜が怖い 287

わが力なきをあきらめしが
されど
草の葉で織る焰ほむろ文様

草
の
徑

老
公

都内の各地域の中小の古書店が連合して神田の古書会館で展示即売会の「古書市」を催しているが、開催日三週間前くらいにその目録が送られてくる。わたしはある新聞社の文化部を定年退職してから三年になるが、たまに雑誌に雑文を書いている。

去年の三月だった。それは目黒のほうの古書店連合の展示会目録だったが、四十ページばかりの小冊子にぎっしりと詰まった活字の中に「西園寺公爵警備沿革史 静岡県警察部 一万円」というのが目にとまった。

わたしの胸は針金で突かれたように動悸がうった。静岡県警察部編の西園寺公邸警備といえど興津の坐漁荘にきまつている。非売品にちがいない。

というのは、戦前に出た司法研修所資料とか警察研修所資料といったものはいっていい検事か警察官の執筆で、検事だと事例を引いての犯罪の分析とか、ときには外国の犯罪研究の翻訳が載ったりする。警察官だと著名犯罪を引用しての捜査の検討とか反省といったものが書かれている。表紙にはどれも「部外秘」の罫いが付いているが、面白いのもあれば、つまらないものもある。しかし、この『西園寺公爵警備沿革史』はかならず充実した内容にちがいないと思った。

坐漁荘の警戒嚴重なことは、新聞社の云い伝えとしてわたしも聞いていた。各社は坐漁荘があ

るために清水に支局を設け、支局長を園公の動静偵察の専任とした。だが、それでも二十四時間交替で昼夜の区別なく坐漁荘の国道一号線側の正門、駿河湾側の裏門ならびに付近を警戒する警官に阻まれて別荘内部の様子は知れなかった。当時の新聞記者が書いた思い出話を読んでもわかるが、若い巡査や邸内の女中の「買収」など思いもよらなかった。

ある社の清水支局長は、坐漁荘の前の民家に臨時通信部を置かせてもらったのが機縁となり、その後も老公のドライヴや夜遅い主治医の京都からの来診や自動車のドアを閉める音、エンジンの響きなどを聞くとその家の家族はすぐさま電話で清水の支局長に連絡してくれたものだ、と回想している。そんな苦心をしてもやはり内部は窺い知れない。

「老公と自動車」というのも、わたしなりに長いあいだ気にかかっている問題があった。

坐漁荘警備は静岡県警察部の受け持ちである。この坐漁荘と、避暑に御殿場の便船塚別荘があるばかりに、静岡県知事は俊秀な内務官僚が任命され、警察部長には腕ききが選ばれたという。警護警官の口の固さは想像以上だったろう。

だが、この「警備沿革史」は静岡県警察部それ自身が編じたもので、坐漁荘警備状況の内部記録と考えられるから、なんとしてでもこの本が欲しかった。

出品する古書店もこれが減多に出ない本というのを知っていて、一万円の値をつけたらしいが、減多に出ないどころか、これを逸したら絶対に入手できないとわたしは思った。おそらく静岡県警察部でも部内用に二百部か三百部ぐらいしか刷らなかつたろう。稀観本中の稀観本といってよい。一万円は安い。五万円でもいい。購買者心理からすると十万円でも高くはない。

が、すでに「古書市」目録に一万円の定価が付いているのだから、買い手がいくら値をつり上

げても駄目である。希望者が多いときは、競売ではなく抽籤による落札となる。わたしは出品の古書店にすぐ電話した。前にもその店からなんとか本を買っている。電話に出たのは若い男の声だった。目録についている番号と書名とこちらの名前を云った。はあ、とっておきますが、申込者が多いときは抽籤になります、と型通りのことをいった。希望者は多いのかね。いまのところあなたさまだけです、これから先はわかりません。「古書市」は三週間目の金曜日と土曜日の二日間開かれる。

当日に古書会館の会場へお出でになりますか、それともあなたさまに決まりましたらお送りしますか、と先方はきく。わたしは神田まで出かけるのがおっくうなのでいつも小包で送ってもらっていたが、このときばかりは氣遣われて、市の第一日いちの金曜日の午前中に会場へ行くと返事した。

その金曜日がくるまであの本の行方が心配でならなかった。一週間経ってその古書店に電話をかけて、『西園寺公爵警備沿革史』の申込みはどれぐらいきているか、とたずねた。この前の若い男が、ちょっと待ってください、といったん引っこんだのは申込者の数を調べているらしい。ほかには一口も来てません、という答えの返るのを祈ったが、その祈りは空しかった。目下三口の申込みがあるという。

翌週もう一度電話した。うるさがられるとも思ったが、今度は女の声が出た。あらためて書名を云うと、六口の申込みですと云った。クジ運の悪いわたしはがっかりした。しかし、今度ばかりはどうしてもその本を手に入れたかった。希望者が殺到しているのは、それだけ価値を知っている人が多いからである。「西園寺公爵」という題名だけでも現代史に興味を持つ人々の申込みのよう

に思われた。西園寺公望きんもちの伝記で良質なのは皆無に近いのである。

わたしがその本を入手したい目的は他にあったのだが、もしクジにはずれたら落札できた人からその本を借覧したいくらいであった。そのくらいに内容を読みたかった。

期日がくると、朝十時には地下鉄の小川町駅に着いていた。古書会館は神田小川町の広い坂を北へ上がつて西へ折れた通りの途中にある。

会場内に入ったのは十時二十分ごろだったが、場内のなん列にもなった棚の上には古書がいっぱいならべられていた。それぞれの表紙には赤い枠の付いた正札が付けられ、枠の中に書名と値段が墨字で書かれていた。場内は棚の本を覗み上げる人々で身動きができないくらいだった。

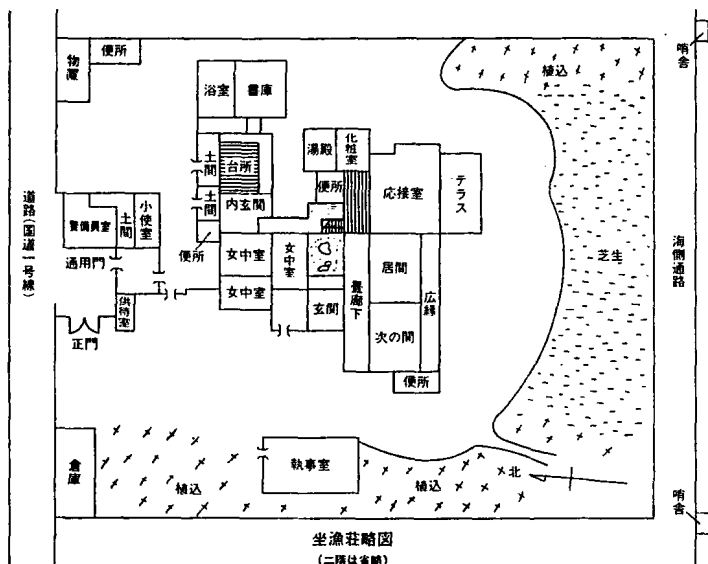
入口近くに受付があり、そこには各本屋からの店員が五、六人集まっていた。受付は勘定場でもあり落札した本の保存所でもあった。

その店員の一人に名前を告げると、彼は横のカーテンを引き、棚に積み上げている本の中からすぐに一冊を抜き出して眼の前のカウンターの上に置いた。表紙の上の長い正札の枠中には「西園寺公爵警備沿革史」と黒々と書かれてあった。

当たったのですか、と思わず問い返さずにはいられなかった。ええ、とその店員は無表情にこたえた。それは出品している古書店の人とは違っていたけれど、包装している彼と、姿のわからない店主とにわたしは手を合せたくなった。

どこにも寄り道せずになすすぐに家に戻った。包装のままに大事な本を脇に抱えては喫茶店に入る気もしなかった。

『西園寺公爵警備沿革史』は、縦二十一糎センチ、横十五糎のA5判であった。紺色クロース装で、二



百八十一ページである。奥付に「昭和十六年十月廿五日発行。発行所・静岡県警察部」とあり、印刷所名があるだけで、定価も、発行責任者の名もなかった。昭和十六年十月の発行といえば西園寺公が逝って一年である。幸いにも本の保存はよかった。寄贈を受けた人がていねいに扱っていたとみえる。

まず、ぱらぱらとめくってみたが、これは園公の一年祭記念として作られた本だとわかった。寄稿しているのは曾て坐漁荘や御殿場便船塚別荘を警備していた静岡県警察部の警部級ばかりで、園公の追悼談がおもになっている。

それでもわたしは失望しなかった。大正五年よりはじまった警備が、昭和十五年十一月の園公死去までその変遷の状況が書かれているからである。「沿革史」と名づけた所以であろう。また、警部らの追憶談も、

本文の略述を補っている。

巻頭に「坐漁莊を建てる迄」が出ていた。

《大正五年当時、興津町国立園芸試験場園芸部主任技師農学士石原助熊氏へ園公首相時代の秘書官川村純蔵氏から公の意として興津へ避寒したき旨相談があったので、石原氏は水口屋勝間別荘階下と二階とが空いていると返事を出したところ、公はさっそく中西房子夫人、令嬢園子、養女元子さんや女中頭のお花さんとともに来興となった。五年から八年までの四冬を水口屋で過した公はいよいよ興津が気に入って、ここに別荘を建てることになった。現在の坐漁莊は公が石原氏と水口屋の土地を檢分して決まったもので、地代は坪十円五十銭であった。

家屋は大正七年夏ごろ着工し、翌八年秋に竣工したもので、設計監督は住友の建築技師乗松幸重郎氏で京都風の造りで、建築費は当時一万円といわれている。入荘はその年の十二月である。

坐漁莊にはその後大正十三年十二月興津園芸試験場長たりし熊谷八十三氏が迎えられ住友社員の資格で執事となられたため、執事室を、昭和四年ごろ応接室を、昭和七年の五・一五事件後に書庫（耐震耐火構造）をそれぞれ増改築したもので、昭和十三年九月国道拡張工事により敷地が大分取られ、家屋全部を後方に移したものである。

坐漁莊は興津町清見寺区一一七番地にあり、北口は東海道に堺し、門を東に向け、玄関までの露地には一方に雑木の木立あり、一方を矢竹の植込みとした。裏庭は公の座敷に面し約四十坪くらいか。芝生に小松、躑躅の植込あり、公の唯一の散歩の場所である。東西十五間、南北二十間、南は海に面し、東南に伊豆半島を、西に遠州を遠望し、三保の松原は眼前に横たわり、清水港の形勝双眸に入るの地にある。ただ惜しむらくは富士の靈峰を仰ぎ得ない。

坐漁莊の敷地は約三百坪で建坪面積は百坪弱、二階建てであつて、二階は十畳、八畳、五畳の三間。階下南向きに公の居間八畳が二間続き、その他には応接用の洋室、女中部屋、浴室、書庫などがある。

別棟は石造倉庫一棟、警護の警備員詰所、執事室、小使部屋等がある。すべて質素平凡な建物だが、公一流の瀟洒な趣味がうかがわれる。

坐漁莊のほかに、京都市田中には清風莊がある。これは公の生家の徳大寺氏の別荘であつたが、公の弟の住友吉左衛門男爵が買い受け、公に贈つたもの。庭の粹は別荘中第一の評がある。

これは坐漁莊の由来を手ぎわよく説明している。

右の中に名が見える中西房子夫人というのは西園寺公の正妻ではない。西園寺家は代々琵琶司で、琵琶の守護神の弁財天に遠慮して昔から正式の婚姻をしない慣習があつた。

しかし、これは俗説である。昔の公卿は有職に通じているため、各種の儀式・典礼・詩歌・伎芸を司掌し、師範となるにはその家の免許を得なければならなかつた。この免許料が有職の諸家の副収入だつた。筆道、插花、蹴鞠、相撲、盲官職（惣検校）、陰陽、神官などそれぞれの家元である。西園寺家は琵琶の司（家元）であり、この免許料という副収入のおかげで、実高は四百石に過ぎないのに、諸太夫以下雑掌にいたる家来三十人ばかりを養ひ得た。それでも琵琶の免許を取る者はそう多くないから西園寺家は貧乏であつた。同家が正室を迎えない家憲というのも誤りで、公望の養父師季の妻は徳大寺実堅の娘であつた。

だが、俗説があるほど西園寺家には正室を入れる当主が少なかつたのは事実であらう。京都の旧い西園寺家屋敷の庭に祀られていたという妙音天とは、弁財天のことである。弁財天への遠慮と云いふらして、うるさい女房を置かずに気のむくままに側室をとり替えていけば、だれだつて

愉しいにちがない。

西園寺公には房子の前に小林菊子がいた。彼女は花柳界の出身だった。公との間に新子が生れている（大正九年歿）。中西房子は園子を育てた。

《お花さんはパリ平和会議にも伴われ、其の幸福を一世に歌われ、公の寵を一身に集めたが、昭和三年三月二日暇を取り、大津湖上園の実家に隠棲していたが、昭和四年二月京都帝大病院で腹膜炎手術を為し予後が悪く三十五歳で死亡した。

その後木津町の豪家八木文太郎の長女あつ子が女中頭たりしことありしも、間もなくお綾さんが女中頭となって現在に至っている。彼女は漆葉綾子といい、京都市下京区西洞院松原下浄土宗大泉寺住職故漆葉宝雲の娘、大正十三年頃二十四歳の時から公に仕えて十七年となる。

2

『西園寺公爵警備沿革史』（以下「警備沿革史」とする）はこれを三期に分けている。

第一期の警備状況は大正五年十二月三十日から八年十二月十日までで、坐漁荘ができてこれに入る前の水口屋別荘滞在中である。東京から越冬にくる期間だから、足かけ四年間だが、実数にすれば約半年間であった。当時は侯爵で、警備は総理大臣前官礼遇に対するものだった。興津町派出所勤務の巡查部長一名、巡查六名が交替で一人ずつ夜間のみの警備に当たった。

第二期は大正八年十二月十日から十一年一月九日まで。坐漁荘に入ってから警備主任の制度ができるまでの間である。大正八年十二月十日から私服の警官一名が江尻署から派遣され、五日交